
遊戯王-運命の引き金-

UZ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王 - 運命の引き金 -

【Nコード】

N6846Z

【作者名】

UN

【あらすじ】

冬が過ぎ高校生活2度目の春を迎えた春日野零一は決闘部に所属している。これは彼を中心とした水森高校決闘部の物語である。

ある日の夕暮

キーンコーンカーンコーン

どこでも同じである学校のチャイムが校内全体に響き渡る。空が橙色に染まりつつある日暮は夕時であり、下校時刻を示すチャイムであった。

そんな学校の中、とある一室は沈みかけの陽によって朱色に染まっております。そんな場所に一人の少年が机の突っ伏しながら熟睡していた。

「……………」

彼の表情には目を覚ますような気配など微塵もない。

このまま、彼はここで一夜を過ごすのではないか？　と思われた瞬間、部屋の扉が勢いよく開かれた。

「じらあ、零ーいー！ー！」

扉を開けた人物は、肩まで伸びた髪のうち右側だけを白いリボンでサイドテールにした女子生徒だ。

すぐに目に入った少年の姿を視界に捉えた少女は、熟睡している少年に対し呆れたような表情を取る。

「つて……寝てるよ……」

すたすたとゆっくりとも速足とも捉えずらい速度で少年の元へと少女は歩く。

そのまま、彼女は少年の椅子を両手で持って……

「仕方ない。起こしてあげますか………えいつ!!」

横へ勢いよく倒した。

無論、その椅子に座っている少年も勢いよく倒れるのは言うまでもない。

ドンツと言つ音を立てて椅子と少年が倒れ少年が勢いよく立ち上がる。

「うあああああ!？ 何だ、奇襲か？ 敵襲か？ 強襲か？」

「……全部、同じ意味だよ零一」

突然の出来事に慌てふためく少年に対し少女は冷ややかにツッコミをいれる。

聞き覚えのある少女の声を聞いたからか、少年はすぐに冷静さを

取り戻した。

「なんだ……あかりか、驚いたじゃないかよ」

ため息混じりに少女の名前を呼んだ少年の名前は、かすがのれいいち春日野零一。
そして、彼を乱暴な手段で起こした少女の名前は、ふじみや藤宮あかり。
落ち着いたのか安堵の息をつく零一のだが、そんな彼にあかりは冷ややかな視線を向けた。

「なんだ……じゃないよ！！ もうすぐ締め切りだよお」

「え……もう、そんな時間か!？」

あかりは室内にある壁掛けの時計に指を指した。
時計は4時25分を示している。

「……で、ちゃんと出来てるの?」

「ああ、ばっちりだ」

あかりの問いに零一は得意げな笑みを浮かべて机の上に置かれていた一枚のプリント用紙を取り出した。

そこには、『部活動紹介申請書』と印刷文字でデカデカと書かれており部活名には『決闘部』とボールペンの文字で書かれていた。

その用紙は間もなく入学式が行われ新入生が入学する際に行われる部活動紹介に参加するための物である。

しかし、その用紙を見たあたりは驚きとの声を上げた。

「な、なにこれっ!？」

「……………え？」

予想と反したあかりの態度に零一も怪訝な目で手元の用紙を見ることにした。

用紙の上部は問題がない。

しかし、下の方に大きな問題があった。

「うえ!？ な、なんだこれ？」

用紙の下の方はヨダレらしきものにまみれていた。

そのせいで文字が読みづらくなっており、読めない部分までもがあるのだ。

それを見て、零一は本当に失敗したような仕草で頭を抱えた。

「あちゃー、やっちゃったな」

「ちゃんと申請書をしまっておかないからだよ。これじゃあ、書き

直すしかないね」

「そうだな……あー、締め切りは5時ちょうどだったよな？」

そこで零一は時計を眺めた。

時刻は4時27分を指している。

残り時間は約30分。

いや、移動時間等を含めればそれ以下だ。

「あかり」

「何？」

『そんな短時間で仕上げるのはキツイ』そう思った零一はある決断をして彼女の名を呼ぶ。

そして軽い口調で助けを求めた。

「ごめん、手伝って」

「やだ」

が、それはたった一言ではっきりと断ち切られた。しかも笑顔で。

しかし、零一もここで諦めることなくさらに頼み続けた。

「頼むよ。今度、宿題見せてやるからさ」

「えー、零一が悪いから自分で責任とってよ。それに宿題見せてあげてるのは私の方だよ」

「ぐっ!?!」

零一はまるで胸に架空の槍が突き刺さったような気分になる。完全に追い詰められた零一であった。

「頼むよあかり、ほらこのとおり!」

「うわー、さすがにそこまでする?」

窮地に陥っているのか零一は土下座までしていた。もはや威厳の欠片もない。そんな彼に対し、あかりは引き気味だった。

「しょうがないなー、じゃあ……」

すると、あかりは鞆の中からプラスチックのケースを取り出した。その中には、カードの束と思わしき物が入っている。

「ここは『決闘部』。なら、これで勝ったら手伝ってあげよう」

「ああ、わかった。わるいけど本気でいくぞ！」

そう言いながら零一も同じようなケースを鞆から取り出し、中のカードの束であるデッキを出した。

そのまま部屋に置かれていたデュエルディスクと言われる装置を装着してはデッキをセットする。

「あ、先行は譲るよ」

「そうかい。じゃあ、行かせてもらっぞ俺のターン」

零一はデッキからカードを引いては、己のプレイングを開始していく。

手始めに場に1枚のカードを伏せた。

「モンスターを伏せてターンエンド」

「私のターンだね、ドロー」

あかりのターンへと移りデッキからカードを引く。

「レスキューラビット を召喚！」

場に、レスキュー隊が使用するように思われる黄色いヘルメットにゴーグル、首にトランシーバーを装着したウサギがあらわれる。その姿は一見、ウサギには似合わないおかしな格好だと思われるだろう。

そんなモンスターだが、彼女の戦術を知る零一表情は芳しくない。

「うわ……さっそくか……」

「そして効果を発動！ このカードを除外してデッキから ジェムナイト・ルマリンを2枚特殊召喚するよ」

レスキュー隊の装備をしたウサギは突如現れた時空の歪めへと飛び込んでいく。すると、雷を纏った宝石の戦士が2体突如同じ歪めから出現してきた。

「さらに2体の ジェムナイト・ルマリンをエクシーズ素材として、ラヴァルバル・チェインをエクシーズ召喚！」

「う……手加減なしかよ」

2体のジェムナイトが重なり合い、炎を纏った海龍が場に現れる。

「当然！ じゃあ、チェインの効果を発動するよ。エクシーズ素材を一つ取り除いて、デッキからジェムナイト・フュージョンを墓地へ落とす」

重ねて置かれたジェムナイト・ルマリンの1枚を墓地へと送りデッキから、キーカードとも言えるカードであるジェムナイト・フュージョンを落とした。そして、そのままバトルフェイズへと入る。

「バトル！ チェインで伏せモンスターを攻撃」

「俺のモンスターはキラー・トマトだ」

伏せていたモンスターが表になると同時に、ハロウィンで見るカボチャのような顔をしたトマトが姿を見せる。だが、無残にも海龍の炎を纏った拳によって鈍い音を立てて潰されてしまった。

「けど、戦闘で破壊されたキラー・トマトの効果。デッキから終末の騎士を特殊召喚だ」

トマトのモンスターが破壊された瞬間、古びた鎧を身にまとう赤いマフラーをした騎士が場へと飛び出してきた。

「 終末の騎士 の効果。デッキから ネクロ・ガードナー を墓地に落とすぞ」

「ふーん、守りを固めるってわけね」

「な、なんだよ、悪いか？」

「いや、別にー」

あかりの態度に、零一は動揺を隠せなかった。
もっとも彼女はそんな彼に対し知らぬ顔をしているのだが。

「じゃあ、気を取り直してメインフェイズにて墓地の ジェムナイト・フュージョン の効果を発動。墓地の ジェムナイト・ルマリオン を除外して手札に加えてカードを1枚伏せる。ターンエンドだよ」

「まずいな。さっそくキーカードが手札に加わったか……俺のターンー！」

再び零一のターン。

彼は、カードを引いては相手の次の手を予測しながら行動を開始する。

「次に攻めてくるのか？ なら、まずはサイクロンを発動！！」

「あっ…… ミラーフォース が……」

零一が発動した魔法カードから竜巻が発生しあかりの場の1枚の伏せカードを吹き飛ばし破壊する。

そのカードは 聖なるバリア - ミラーフォース - だった。

「よし！ 俺は B F - 精鋭のゼピュロス を召喚して 終末の騎士 と ゼピュロス をエクシーズ素材に N O ・ 3 9 希望皇ホープ をエクシーズ召喚！！」

「う……」

零一の次の手はモンスターを召喚し、エクシーズ召喚を行うことだった。

あかりは自身の場の ラヴァルバル・チェイン の攻撃力を上回るモンスターを召喚されたことに表情を引きつらせた。

「バトルフェイズだ。 希望皇ホープ で ラヴァルバル・チェイン を攻撃！！」

大剣を携えた戦士のモンスターはその剣を大きく振り上げ、炎の海龍を一刀両断した。

さらに、その攻撃力の超過分としてあかりのライフに700ポイントが削られ残りは7300となる。

「俺はこれでターンエンドだ」

「……私のターン、ドロー」

現在の状況なら、零一が優勢だと判断できるだろう。だが、このドローフェイズにてあかりの手札は7枚。ここからが、本番だと言っても過言ではないだろう。

「よし、 ジェムレシス を召喚！」

アルマジロのようなモンスターが現れる。

攻撃力は1700と零一の場の 希望皇ホープ には及ばない代わりにある能力を持っている。

「 ジェムレシス の効果。 召喚に成功したときデッキからジェムナイトを1枚手札に加えることができる。 ジェムナイト・オブシディア を手札に加える」

デッキから1枚のカードを見せては手札に加える。

本来なら融合を主軸とするデッキは手札の消費は激しいのだが逆に言えば、手札がある分その力はすさまじいのだ。

「手札 ジェムナイト・フュージョン を発動！ 場の ジェムレシス と手札の ジェムナイト・オブシディア を融合して ジェムナイト・ジルコニア を融合召喚！！」

2体のモンスターが融合し、1体のジェムナイトのモンスターが場に現れた。

騎士のような風貌にその両腕が巨大な槌となった力強さを感じるモンスターだ。

だが、あかりの戦術はこれからだった。

「そして ジェムナイト・オブシディア の効果発動。手札から墓地へ送られた場合、私の墓地から通常モンスターを特殊召喚できる。ジェムナイト・ルマリンを特殊召喚！！ さらに、墓地の ジェムナイト・フュージョン の効果を発するよ」

「げえ……」

場に融合素材になりうるジェムナイトを出し、さらに ジェムナイト・フュージョン を手札に加えようとするあかり。

このままだと一気に押し切られてしまうと零一は思った。

「 ジェムナイト・オブシディア を除外して手札に戻す。そしてまた、 ジェムナイト・フュージョン を発動だよ。場の ジェムナイト・ルマリんと手札の ジェムナイト・サファイア を融合し ジェムナイト・プリズムオーラ を融合召喚！！」

「っ……破壊効果を持つジェムナイトかよ……」

2体目のジェムナイトの融合モンスター。

同じく騎士のような風貌に、今度は盾と剣を携え雷を帯びたモンスターだった。

「さて、墓地の ジェムナイト・サファイア を除外して ジェムナイト・フュージョン を回収して…… ジェムナイト・プリズムオーラの効果を発動するよ。手札に戻した ジェムナイト・フュージョン を捨てて 希望皇ホープ を破壊！」
「っ……」

天から ジェムナイト・プリズムオーラ の剣に雷鳴が落ち、激しい音を立てて鳴り響く雷を剣に宿しながら剣を 希望皇ホープ へと振り下ろす。

剣に帯びた雷は解き放たれ、希望皇の名を持つ剣士を穿ち貫いた。

「じゃあ、バトル！ プリズムオーラ でダイレクトアタックだよ」

「くっ、通す」

雷の帯びた剣の一太刀を零一は直接受けた。

これで ジェムナイト・プリズムオーラ の攻撃力2450が直接、零一のライフに削られ残り5550へと減少した。

「続いて ジルコニア でダイレクトアタック!!」

「それは、通せないな。墓地の ネクロ・ガードナー を除外し攻撃を無効にする！」

今度の攻撃は通らず、半透明の ネクロ・ガードナー が零一の

盾として守る。

その守りを破ることなく ジェムナイト・ジルニコアの攻撃は
終了を迎えることとなる。

「これでターンエンドだよ」

「っ……俺のターンだ」

あかりの場には2体の融合モンスター。

零一の場合にはモンスターが存在しない。

伏せカードがないだけマシだが状況は圧倒的に不利である。

このまま、状況をひっくり返さなければそのまま押し込まれるのがオチである。

「闇の誘惑 を発動。カードを2枚ドロウ、そして…… クリッター を除外」

1枚のカードを手札から除外する。

本来ならこのような状況でも クリッター を除外する優先度は低いのだが、零一にはある狙いがあった。

「さらに、アームズ・ホール を発動だ。デッキトップを1枚墓地に送り……む、ブラック・ホール」

アームズ・ホールの第一効果で墓地へ送られたのは無条件で

場のモンスターを全滅させる強力カードだった。
それを見て、運がないと思えるもプレイングを続行する。

「まあ、いいや。デッキから D・D・R を手札に加えて、発動
！！ 手札の ダーク・バースト を捨てて除外されてる クリッ
ター を特殊召喚し装備！」

「む……それで クリッター を除外したんだ」
「その通り、けど驚くのはこれからだぞ」

そうして零一は墓地から1枚のモンスターカードの効果を発動さ
せた。

「墓地の 精鋭のゼピュロス の効果！ 場の D・D・R を戻
して特殊召喚。そして、 D・D・R を装備していた クリッタ
ー は破壊され効果を発動。攻撃力1500以下の B F - 疾風の
ゲイル を手札に加える」

「ゲ、ゲイル!？」

「そのまま、 疾風のゲイル を特殊召喚。 精鋭のゼピュロス
と 疾風のゲイル をシンクロ素材に ブラック・ローズ・ドラゴ
ンをシンクロ召喚!!!」

2体のモンスターがシンクロ素材となり、深紅の薔薇の竜が降臨
した。

瞬間、無数の深紅の花弁がフィールドを舞う。

「ブラック・ローズ・ドラゴン がシンクロ召喚に成功したこと

により、場のカードを全て破壊する」

「っ……」

花卉が全てを包みこむと場には何一つ残されることなく消滅していた。

例外はなく、ブラック・ローズ・ドラゴン までも。

場を全滅させることができた零一だが、彼はすでに アームズ・ホール の効果でこのターンの召喚権を失っている。

普通ならこれでターンを終了するだろうが、彼の手札には1枚のキーカードがあった。

「今の俺の墓地には キラー・トマト 、 終末の騎士 、 クリッター 、 BF - 疾風のゲイル 、 BF - 精鋭のゼピュロス の5枚。よって手札から ダーク・クリエイター を特殊召喚だ！」

「え、嘘!？」

零一の墓地には特殊召喚の召喚条件をギリギリ満たしていたため、
ダーク・クリエイター が特殊召喚された。

元は橙色のはずなのだが、このモンスターは漆黒の色に染まっていた。

「ダーク・クリエイター の効果で墓地の 精鋭のゼピュロス を除外し、 終末の騎士 を特殊召喚。そして効果で2枚の ネクロ・ガードナー を落とす。そして、バトルフェイズ!！」

反撃の準備を済まし、そのままバトルフェイズへと移る。

「 終末の騎士 、そして ダーク・クリエイター で直接攻撃だ」
「っ……っここで、これは結構痛いね」

2体のモンスターの直接攻撃を防ぐこともできずに受ける。
あかりのライフが7300から計3600と元々の半分を切った。

「よし、俺はこれでターンエンドだ。」

このターンで零一は一気に形成を逆転させることができた。
彼のターンの終了宣言でこのデュエルの5ターン目が終了する。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6846z/>

遊戯王-運命の引き金-

2011年12月23日00時55分発行